



Title	W. M. ヴォーリズの住宅設計の特色に関する研究 : 関西学院外国人住宅群を事例として
Author(s)	神谷, 悠実
Citation	デザイン理論. 2014, 63, p. 92-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56295
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

W. M. ヴォーリズの住宅設計の特色に関する研究

— 関西学院外国人住宅群を事例として —

神谷悠実／大阪芸術大学

はじめに

W. M. ヴォーリズは米国から来日し、ヴォーリズの率いた建築事務所は1910～30年代を中心に、数多くの洋風建築を設計した。なかでも住宅作品が多く、その実数は300件近くにおよぶ。ヴォーリズ建築事務所ではなぜ多くの作品を設計することができたのか。その背景には標準化された設計手法があったのではないだろうか考える。

そこで本発表ではヴォーリズの数多くの設計作品の中から複数の住宅で構成された住宅群に焦点を当てた。取り上げた作品はヴォーリズ建築事務所における円熟期に設計された、10棟の関西学院外国人住宅群（1929年）とニューヨークシティ銀行（以下NCB）大阪支店の4棟の行員住宅群（1929年）である。各住宅群の特色を分析し、さらに両住宅群の設計手法との相互の比較を行うことで、ヴォーリズ建築事務所における住宅群の設計方法の実態を把握し、設計するうえでの標準化及び自己同一性の具体的な表現方法について考察を行った。

なお前者の調査は、関西学院の研究チームによって2011-12年に行われた住宅調査に参加した成果に負うところが大きい。

関西学院大学外国人住宅群

関西学院外国人住宅群は1929年に西宮キャンパス創設時に北側の小道に沿って当初10棟が建てられた。現在9棟が残っており、外国人教員住宅や共用施設として使用されている。

この住宅群に関する設計図面は基本計画図18枚、詳細図9枚が現存している。基本計画

A・B・C案の3案があり、それぞれの平面および立面案と3案共通の断面図が作成されている。

平面計画については3案ともほぼ同一の間取りで、主屋部と付属部とに分かれている。主屋部の1階はホールを中心に四方を書斎（C案のみ少し小さい）、居間、食堂、台所とが取り囲む間取りになっている。A、C案については南東部に食堂と連続してプレイルームが取り付いている。2階も階段室の四方を寝室が取り囲む。付属屋は給仕機能を持つ室で構成されており、主屋の北東部と緩やかにつながっている。1階は洗濯室や納戸として、2階は女中のための和室2室が配されている。

立面計画についてもほぼ同じであるが、屋根の架け方は2種類のデザインが検討されており、扉や窓のデザインが一部異なる。

詳細図では3案に共通の台所や階段室の詳細図の他に、12種類の玄関ポーチ、6種類の玄関扉、4種類の煙突、10種類の暖炉のデザインヴァリエーションが表現されている。

これらの基本計画案が実施設計にどのように反映されているのか分析を行った。実施案は9棟の住宅群のうち8棟を実測調査し、現状と設計図面とを対照させ、創建時の状態を推定して復原設計図面を作成した。

8棟の住宅は平面についてはA案が2棟、B案が3棟、C案が3棟に反映されており、立面については計画案では2種類であったが、実施設計では3種類の屋根の架け方のデザインが用いられていた。細部に着目すると、玄関ポーチは8棟ともデザインが少しずつ異なっており、玄関扉や煙突も詳細図の中から

いくつかのデザインが採用されていることが確認できた。ただし暖炉については多くが改造されており、確認できなかった。

以上のように、関西学院外国人住宅群は間取りを標準化し、外観や細部に自己同一性を表現するという非常に合理的な手法で設計されていることが確認できた。さらにこれら9棟の住宅は横一列に配列されており、方位による日射量などに差異が生じないように配慮されている。窓の位置・大きさなども規格化されているので、住環境も均質化が図られているといえる。また装飾部分のデザインも概ね簡素なものであり、徹底的に均質を意図して設計された事例であるといえる。

NCB 大阪支店行員住宅群

NCB 大阪支店の4棟の行員住宅は西宮市の雲井町と殿山町の2つの街区にわたって建てられていた。阪神大震災の際に建て替える余儀なくされてしまい、最近まで残っていた単身者住宅1棟も姿を消している。

この住宅群に関する設計図面は、作品毎に基本計画から詳細図に至るまでの図面が現存しており、図面を元に4棟の住宅の特質の分析を行った。

平面計画について、間取りの構成は4棟とも非常に類似しており、関西学院外国人住宅群と同様主屋と付属屋に分かれている。主屋の1階は中央に玄関とその奥に階段のあるホールを配し、ホールの両脇に居間および食堂と台所を設けている。2階は中央の階段室を取り囲むように寝室や書斎が配されている。付属屋は地下階や主屋の一部から緩やかにつながっている。各住宅の室の大きさは4棟ともほとんど差異がない。

立面計画についても窓の位置や大きさは少しずつ異なるものの階高は共通であった。ただし細部意匠に着目すると暖炉、玄関ポーチ、

窓廻の状況から判断して支店長、副支店長、会計士、単身者の序列で細部意匠に材料や装飾度合いなどの差異が確認できた。

この住宅群は居住環境を均質にし、細部意匠で格式を表現している事例であるといえる。

まとめ

本発表においてヴォーリス建築事務所における住宅群の設計方法に大きく2つの特徴があることを指摘できた。

・形式化された設計と均質な住環境

住宅群の設計に際し、共通の平面形式を留意していることが確認できた。両住宅群の間取りとも長い廊下を持たず室同士の行き来を円滑に行うことのでき、主要空間と給仕空間とを緩やかに繋ぐ室構成は、合理性が追求されている。

立面については階高や、窓の大きさや位置などを共通点の多いことが確認できた。両住宅群とも居間などの共用室には大きな窓を配し、浴室などプライバシーを守る必要のある室は高い位置に小さな窓を配するといった室の用途に応じた設計がなされている。

以上のようにヴォーリス建築事務所では住宅設計において間取りや窓の位置を形式化させることで、住まう人に快適で均質な住環境を提供していたことを確認できた。

・部分的な要素に表現される自己同一性

各住宅の個性は玄関ポーチや暖炉、細部装飾などといった部分的な要素に表現されていることが確認できた。その手法は並列関係にある住宅相互においてはヴァリエーションで、序列関係のある住宅相互においては材料やデザインのグレードで表現されていることを確認できた。